平成11年6月8日第三種郵便物認可（年4回2・5・8・11月の10日発行）第211号 令和7年11月10日発行

全国曹洞宗青年会

SOUSEI

vol. 211

2025 November

特集「伝える言葉、残す想い」

大竹稽先生インタビュー　「書くこと」の本質：AI時代の文章と「究極の遊び」

吉田俊英老師インタビュー　文章を通じて伝える仏道の旅

特集まとめ　文章に込めた想い

伝える言葉、残す想い

伝わっている？？

全曹青で発行しているこの広報誌『SOUSEI』。この冊子を、どんなふうに手に取り、読み進めてもらえるのか。そう思うと、制作に関わる私たち広報委員はなんだか感慨深い気持ちと、感謝の想いでいっぱいになります。ページをめくる音、記事に見入る真剣な眼差し、そして何かを感じてくださった瞬間の心の動き。その一つひとつを想像することが、私たちの何よりの喜びです。

この一冊が出来上がるまでには、本当に長い道のりがありました。企画会議では「今、青年僧侶の皆さんは何に関心があるだろうか」「どんな情報が日々の活動の支えになるだろうか」と、議論を重ねました。取材では、貴重な時間を割いてくださる方々の想いを一言一句漏らさぬよう、必死にペンを走らせました。そして、集まった原稿を前にして、「この表現で誤解を生まないか」「もっと心に響く言葉はないか」と、一文字ずつ言葉を確かめるような校正作業が続きました。その一つひとつの過程に、「青年僧侶の皆さんに役立つ情報を届けたい」「私たちの活動に込めた想いを分かち合いたい」という、私たち広報委員の切実な願いが込められています。

その一方で、私たちの胸にはいつも一つの問いが浮かびます。それは、「この想いは、本当に伝わっているんだろうか」という、根本的な問いです。情報が洪水のように押し寄せ、次から次へと生まれては消えていく現代社会。スマートフォンの画面を指でなぞれば、瞬く間に世界中の出来事が流れ込んできます。そんな中で、私たちが丹精込めて作り上げたこの一冊が、その情報の渦に飲み込まれてしまうのではないか。この問いは、そんな時代だからこそ、とても大切な意味を持っていると私たちは考えております。

言葉を慎重に選んだつもりでも、受け取る方の経験や価値観というフィルターを通して、意図と違う意味で伝わってしまうかもしれない。良かれと思って綴った表現が、思いがけず誰かの心を曇らせてしまうかもしれない。情熱を込めて作ったページが、たくさんの情報の中に埋もれて、誰の心にも届かずに読み過ごされてしまうんじゃないか。そんな、送り手と受け手の間にある、見えないけれど確かに存在する溝を思うと、不安になることは少なくありません。

この悩みは、広報誌を作っている時だけの話ではありません。むしろ、私たち僧侶が日々向き合っている課題そのものだと言えるかもしれません。私たちは、二千数百年という遥かな時を超えて、多くの祖師方が命懸けで護り伝えてきた教えの灯火を、今の時代を生きる人々の心に灯していくという、大きな流れの中に身を置いています。法話やご葬儀、ご法事の場での何気ない一言、お寺の行事で顔を合わせた地域の方との会話。そのすべてが、仏様の教えや自分の想いを「伝える」大切な機会です。でも、その言葉は、本当に相手の心の奥底に届いているのでしょうか。私たちの想いは、誤解なく、その温かさを保ったまま伝わっているのでしょうか。

一生懸命準備した法話なのに、聴衆の反応が今ひとつだった時の、あのがっかりした気持ち。大切な話をしているのに、相手に真剣に聞いてもらえていないと感じた時の、胸にぽっかりと穴が開いたような虚しさ。あるいは、「自分の未熟さのせいで、仏様の教えの奥深さや温かさを、ほんの僅かも伝えきれなかったんじゃないか」と自分を責める気持ち。こうした経験は、きっと多くの皆さんにもあるのではないでしょうか。「伝えたい」という想いが真剣で、切実なものであるほど、「伝わらない」という現実に直面した時にもどかしく、無力に感じてしまうものです。時には、「自分は本当にこの教えを伝えるに値する人間なのだろうか」と、自分自身のあり方まで揺らいでしまうような、そんな問いに繋がることさえあります。

そこで今回の特集では、誰もが一度はぶつかるこの「伝える」ことの難しさと、その先にある大きな可能性について、真正面から考えてみたいと思います。テーマは、「伝える言葉、残す想い」です。

言葉を選び、想いを込めて、相手に届けるという技術。そして、そうした営みを記録として未来へ繋いでいくという心構え。この二つは、車の両輪のように、切り離すことができません。考えてみれば、私たちが今、こうしてお釈迦様の教えに触れることができるのも、昔の人たちがそれを経典などの形にして、大切に「残してくれた」からこそです。「伝える」というその場限りの行為も、「残す」ことによって時代を超えた一本の線となり、未来へと繋がっていきます。そして「残す」ことは、未来の誰かのためだけではありません。自らの活動を記録し、振り返ることは、今の自分自身の歩みを確かめ、次の一歩を踏み出すための大きな力にもなるはずです。

私たち自身の言葉と想いを未来へどう繋げていくのかを、今回の特集で考えてみたいと思います。

文／広報副委員長　信行一宏

大竹　稽 先生

哲学者・作家。東京大学大学院修士課程修了。出版社や一般社団法人の代表も務め、編著書は 23 冊を数える。娘の自閉スペクトラム症（ASD）診断を機に、自身にも同じ特性があると自覚したことを天命と捉える。現在は発達障害の子どもと母親を支援するため、オンライン学習塾や図書館、寺子屋を主宰するなど、多岐にわたる啓蒙活動を行っている。

「書くこと」の本質：AI時代の文章と「究極の遊び」

今回は、作家であり教育者である大竹稽先生をお迎えし、文章を書くことの本質や、AI時代における人間の文章の価値について、対話形式で深く掘り下げていきます。大竹先生が「書くこと」を「究極の遊び」と表現されるその視点や、禅的な思考に通じる文章哲学は、私たちの文章作成に新たな示唆を与えてくれることでしょう。本インタビューは、約1時間半にわたる子どもたちへの文章教室を見学した後に行われ、大竹先生の独自の指導法や「書くこと」に対する深い洞察が明らかになりました。

―私達僧侶がお檀家さんをはじめとする多くの方々に教えをお伝えする際、どうしても言葉が難しくなったり、説明が不足したりといった課題に直面することがあります。今回の特集では、「テキスト」、つまり文章による表現に焦点を当ててお話を伺いたいと思っております。そこでまず、大竹先生が考える「書くことの原点」についてお聞かせいただけますでしょうか？

私にとっての原点は、「自分との対話」です。自身の「できなさ加減」を認識し、それを明らかにしていくプロセスなのです。これは、自分ができることをどんどんどんつまびらかにしていくという感覚に近いです。確かに、自分の中に考えるネタやアイデアが色々とあるのは確かなのですが、そこから先に繋がるような言葉が自分の中で見つからないということもよくあります。そのような時には、本を読んだりすることで、その道筋を作っていくということをします。結局は、自分自身の「できなさ加減」と向き合いながら、それこそ先人が残した文献を読み込んでいくことで、また新たな道筋を作り、それを繰り返している、という感じですね。

―その「自分との対話」を深める上で、どのようなインプットを重視されていますか？

インプットといっても、単なる知識の詰め込みではありません。むしろ、「自分なりの問題意識やアイデア」を、書くための「スタート地点」として自分の中にたくさん蓄えることを重視しています。知識そのものであれば、それこそパソコンを使えば、人間以上に豊富な情報を瞬時に得られますからね。しかし、その知識を整理し、自分なりの意味を与える「最初の土台」は自分の中にしか存在しないので、そこを大切にしていくというのがあります。

「究極の遊び」としての文章表現：完璧から不完全さへ

―別のインタビュー記事で「書くことが究極の遊び」だと表現されていました。多くの人は「書かねば」というプレッシャーを感じ、文章作成に苦手意識を持っている方も少なくありません。私も、

文章を書くとなると、どうしても「書かなければ」という義務感やプレッシャーを感じてしまうのですが、それを「遊び」と捉えるにはどういった心持ちが必要なのでしょうか？

それは少し難しい質問ですね（笑）。まず、独りよがりの文章は駄目です。ただ、あえて不完全さをさらけ出すことに、読み手への期待と、そして敬意があると思うんです。

例えば、きちんと原稿を仕上げて法話をされる布教師さんもいれば、壇上から降りてきて、まるで聞き手の中に入り込んでしまうような布教師の方もいます。僕はそこに遊びを感じるんです。自分を聞いている場所に飛び込ませてしまうような感覚や姿勢というのは、聞いている側もどこか楽しいですし、完璧なものではなく、「こういうことしかできない不完全な自分」というのを、聞き手の懐に飛び込ませるような姿勢がやはり必要だと思います。

何か物を書くときも同じで、たくさん知識があって難しい本を読んでいるからといって、読み手にとって良い文章が書けるわけではありません。むしろ、読んでいる人たちが、「あ、この書き手は自分たちの目線に降りてきてくれているな」という部分に出会うと、やはり楽しいと感じるものです。そういった部分が、私の考える「遊び」の部分ですね。実際に話をするときも、つい自由に遊んでしまうような感覚です。校長先生が壇上で話すよりも、立場に関係なく下に降りてきて話ができる先生の方が、やはり楽しいと感じるでしょう。文章に関しても、難しい言葉遣いばかりではなく、専門知識がない人にも読めるような「遊び」があった方が良いと私は思います。

みんな格好つけすぎているような気がします（笑）。恥ずかしい部分など自身をさらけ出すことが、むしろ聞き手としては共感しますよ。

禅の教えが導く文章：「不自由なままの自由」と「雑な人モ」の意義

―「書くことの原点」という話に繋がってきますが、先生の文章哲学では、特に「不自由なまま自由になる」という視点が禅にも深く通じていると感じます。それは一体どういうことでしょうか？

例えば、人間が神と同じレベルになって、あらゆる言葉を知っていて、あらゆる文法や修辞を駆使して「何でもできますよ」と言ったら、おそらく何も伝えられなくなると思います。やはりその「不自由」というのは、自分自身の「不自由さ」、つまり「これだけしかできない」というベースがまずあって、それをどういうふうに使うかというところでしか、僕にとっては「自由」というのは見えてこないと思うんですよね。

だから、哲学的な思考にとっても、「自分は今のところここまでしかできない」というのをきちんと受け入れることが中心で、その上で「これをどうするのか」というところが重要だと思うので、ベースはやはり「不自由」だと私は思っています。

―文章作成のテクニック的な部分について伺います。文章を書くとなると、苦手意識を持っている方が多いと思います。書くための「心の準備」や、具体的な「実践」についてお聞かせください。

文章を書くときに、最初から「誰もが読んで感動するような完璧な文章を仕上げよう」というのを、いきなり考え始めてしまうと、多分一文字も進まないと思います。エッセイというのは、自由な文体で進められますよね。例えば、枕草子もそうですし、吉田兼好も、フランスのモンテーニュもそうです。彼らは確かに、いきなり書き始めてしまうのですが、それは相当文章の修業訓練ができている人たちだからこそできることだと思います。もう本当に、言葉にはできないような修業の結果でしょう。

一番良いのは、まず「型」はあるということです。誰もが分かりやすく理解できるような型は確かに存在します。しかし、その型にはめて最初から書き始めてしまうと、これもまた苦行になってしまいます。具体的な手法としてはメモを作るという方法があります。簡単なことで構わないので、「雑に」メモとして、とにかく書き出していくことが大切です。そこでまた調べものが必要ならそれを書き出し、その書き出したものを目に見える形にする、もしくは人が見えないままでも自分の中で咀嚼していったときに、多分自分なりの何か「スタートとゴール」が見えてくるはずです。そこでようやく型というのをはめていけば良いでしょう。まずはメモをたくさん書いて、「こんなもん、こんなもん、こんなもん」と、思いつくものを並べてみる。その中で、取捨選択していって、「これは使えないな」「ここはなんか面白そうだ」というものを出してみる。多分そこら辺は、僕にとって「遊び要素」だと思います。完璧なものを目指すのではなく、とにかく「自分の中から雑に生まれてくるようなもの」を、とにかく出していく。その中に何か、それこそ良さそうな「花が咲くようなポイント」があったりする、というところかなと思います。

―今の「雑に生まれてくるもの」という表現は、私たちが実践している坐禅にとてもよく似ていると思いました。

確かに、そこら辺は僕も坐禅などを通して身につけたものかもしれないですね。みんな、すごく手がかかって見栄えの良いバラの花をいきなり仕上げようと思ってしまうと思います。でも、もちろんそれはそれで良いのですが、むしろそ

の「雑草」といいますか、自分から生まれてくる色々な雑草を、とにかく描き出していくと、多分その中で面白い花を咲かせるようなポイントが、やはり見つかると思うんですよね。そこが重要だと思います。

AI時代における人間の文章の価値：不完全さと個性が生む共感

―現代はAIが文章を書く時代に突入しており、便利に感じることもあります。AIが作成する文章についてどのように考えていらっしゃいますか？

例えば、法律の文章などそれはもうAIに任せてしまった方が良いと思います。誰もがそこに関しては理解をしなければいけないというようなことなので、それに関してはAIの得意分野だと思います。

しかし、「私の考え」や「私の世界観」というものを伝えられるのは、自分自身の文章だと思っています。これは法話をされる方にも伝えたいのですが、「これ、AIでも書けるな」という文章に出会うことがあるんですよ。要はインターネットの中にある文章を繋いだら、こういう話になるな、というような、もうテンプレートのような文章に出会うことが多いんです。不思議なことにそんな文章は、あまり心に響かないのです。読み手の「共感」を生むような文章を作ると

なってくると、それはもうAIでは書けません。頭で理解するのではなく、心に働くような文章というのは、絶対にAIでは書けないので、むしろAIが出たことは、私もすごく「ありがたいこと」だと捉えています。

おそらく多くの人たちは、「これはAIが書ける文章か否か」という判断をし始めると思うんです。そうすると当然ですが、AIが書いた文章は、やはり退屈というか、「もう少しちゃんと心に働くような文章を書きましょう」というような気持ちになっていくと思います。そうなってくると、人間の文章のレベルがどんどん上がっていくじゃないですか。それは本当にありがたいと思います。

AIは綺麗ですから「雑なもの」はないですよね。もう全部仕上がっています。でもそれは「機械じかけの仕上がり」であり、個性を感じません。「仕上がっていないからこその個性」というのは、大事だと思います。ある意味で「でこぼこ」を残してほしい、という感じです。

推敲の極意：自分を信じすぎず「他者の目」を通す

―文章を書く上で、多くの人が推敲の難しさに直面します。自分で書いた文章を読み直すことに抵抗があったり、何度も見ているうちに何が良いのか分からなくなったりすることはよくあります。先生は推敲について、どのような考えをお持

文章教室「作文堂」

東京都港区三田
臨済宗妙心寺派龍源寺で開催される文章教室「作文堂」

主に小学生を対象とした文章教室「作文堂」には、親子で参加する姿も多く見られる。プログラムは1時間半。本来は心を落ち着ける坐禅から始まるが、今回の取材時は会場の御住職が不在だったため、坐禅は行われなかった。

教室は月に1回開かれ、2ヶ月かけて一本の作文を丁寧に仕上げていく。前半は、受講生が自ら選んだ絵本などの課題本を読み合わせ、登場人物や自分自身の感情を一つひとつメモに書き出す。同伴する親が、子どもの気持ちを引き出すように意見を述べる光景も見られた。後半は、そのメモをもとに文章として紡いでいく。

見学して印象的だったのは、子どもたちの姿だ。一見、集中が切れているように見えたりしても、どの子も時間をかけながら、自分の内なる感情を懸命に言葉にしようと向き合っていた。もし自分に子どもがいたら、ぜひ通わせたいと思った。自分の気持ちを言葉にする喜びと大切さを、この教室は教えてくれるだろう。

ちですか？校正作業など、私たちも広報誌制作の中でやっていることではあるのですが、ご自身の中で、校正や推敲の仕方等、何か心がけていることはありますか？

推敲は「自分がやっちゃいけない」と思っています。だからもうやはり、本を出版するといった一つの大きな使命を持ってるときは、編集者を通さないといけないですし、そういう他者の目を通して、きちんとそれこそしっかりと鍛えてもらう、言葉を選んでもらう、というふうにしています。

もし自分で推敲するなら、もう本当に書いたことすら忘れて、もう一度読み返すくらいの期間を置かないと本当の推敲はできません。だから、信頼する誰かに任せてしまった方が良いと思いますね。

本を出版するとなってくると、色々な人が関わってきます。自然と「任せなきゃ」という意識になってきますね。最終的に出来上がった本だって、別に完全な状態で絶対に出せるわけではないんですよ。だから多分「9割くらいの満足度で出せればいいな」というくらいです。そしてそこでも、やはり人が関わっていた方が良いじゃないですか。自分一人だと「100パーセント完璧にしなきゃいけない」と思ってしまいますけど、もう3人ぐらいのチームで9割ぐらいの良い感じになったら、上出来でしょう、という感じですかね。

不完全な文章が紡ぐ共感

—最後に、これからの書き手、そして私たち青年僧侶に向けて、文章を書くことを通じた「楽しさ」や「意義」について、メッセージをお願いします。

「文章の向こうには読み手がいる」ということを意識していただきたいと思っています。今後生成AIがより発展していって、誰にでも届く文章という意味では簡単に作ることができる時代になってきます。ただ、読み手が生身である限り、「不完全なところ」とか、「不確かなところ」とかが見えてくると、やはりそこに何か「人間っぽいな」という匂いを感じるものです。そのような不完全性がある方が、やはり話を聞く気になる、読みたくなる、というところはありますね。

AIの時代だからこそ、人間の持つ「不完全さ」や「個性」を恐れず、それを強みとして文章表現に活かしていくこと。緩やかな気持ちで文章を書いていただけると嬉しいです。それが、読み手の心に深く響く「究極の遊び」となるでしょう。

取材／広報副委員長　信行一宏
広報委員長　竹田龍永

文章を通じて伝える仏道の旅

現代社会において、文章を通じた情報発信は、教えを広め、コミュニティを結びつける上で極めて重要な役割を担っています。長年にわたり寺院の会報やブログを通じて情報発信を続けられてきた宮城県仙台市洞林寺住職の吉田俊英老師に、その執筆活動の原点や経験、そして若い世代への貴重な助言を伺いました。公務員としての経験、大学院での研究、そして住職としての日々の実践を通じて文章力を磨いてこられた吉田老師のお話は、情報発信の価値と継続する上での心構えについて、多くの示唆を与えてくれます。

吉田 俊英 老師

宮城県仙台市洞林寺住職。岩手県一関市生まれ。早稲田大学法学部卒。駒澤大学大学院人文科学研究科仏教学専攻修士課程修了。曹洞宗大本山總持寺にて修行。住職ブログや WEB お悩み相談サイト『hasunoha』で発信活動を続けている。

—今回の特集では「文章を通じて伝える」というテーマを深掘りしていきたいと考えています。老師は、かなり以前からブログを通して様々なことを発信されているイメージがあります。平成16年頃から始められたそうですが、その当時はまだHTMLのタグを使って作成する時代だったのではないでしょうか？

私の情報発信の原点は、ブログよりもさらに遡る、寺の会報にあります。これは前の住職の時代からずっと発行し続けているもので、当初は年4回、1回あたり4ページか6ページくらいでした。私が住職になってからは、檀家さんや役員さんの協力を得て、最低でも8ページ、多い時には16ページの会報を作っています。基本的には、誌上法話的な原稿を書

くように努めています。原稿不足などで、会報の空きスペースが発生する場合は、追加で原稿を執筆する必要もあり、「仏事Q&A」「住職が語る終活講座」「カルト宗教から身を守るために」といった内容の記事を書いていました。

―檀家さんを巻き込んで会報を作るというのは、非常に珍しい形態だと思います。住職お一人で全てをやろうとすると、なかなか継続は難しいですよね？

まさにその通りです。自分の原稿を一つ書くだけでも、正直なところ、かなり大変な作業です。それに加えて、私の寺では毎月婦人会があり、そこでもお話をしなければなりません。法話も決して得意ではなかったので、婦人会で話をするのも、私にとっては「難行苦行」でしたね。前住職は法話の「名人」と評されるような方で、高校時代には近隣のご寺院様と一緒に「日曜学校」を開催し子どもたちにお話をし、駒澤大学時代は児童教育部で活躍された方でした。更に永平寺安居時代には仲間の雲水と「永平寺日曜学校」を創立し門前の子どもさんたちに慕われたそうです。その後、海外開教師としてブラジルでの布教にも邁進され、長年法話の訓練と実践を積み重ねて来られた方です。

―それでも、檀家の方々は熱心に耳を傾けてくださるのですね。

ある時、婦人会のおばちゃんが「今日の話はわかりやすかった」と褒めてくれたことがありました。それを聞いて、「ああ、今までの話はひどかったんだろうな」と、苦笑いせざるを得ませんでした。辛抱して聞いてくだった方々には感謝しかありません。いくらかでもましな住職になるよう、私を育ててくださいました。至らない住職でも、「この住職さんだから聞いてあげなきゃ」と思ってくださる方がいるのはありがたいことです。何十年経っても自分の話が上手いとは思いませんが、何とかA4用紙1枚分くらいの資料を作り、お話しさせていただいております。「今日は面白かった」と言ってもらえる時もたまにあるので、いつになっても学びが必要だと感じています。これもささやかな修行だと思っています。

文章力の源泉と多様な経験

―老師は元々文章が苦手だったとおっしゃいますが、長年にわたり会報やブログを継続されていることは本当に素晴らしいことだと思います。その文章力が培われた背景には、どのような経験があったのでしょうか？大学時代から執筆活動に取り組んでいらしたのでしょうか？

私は小学校時代から本を読むのは好きでしたが、作文は苦手でした。小中高、そして大学の最初の頃まで、レポートも下手で苦労していましたね。転機となったのは、大学院に入ってからです。修士論文を執筆する過程で、少しずつ文章が書けるようになりました。また、ちょうどその頃、ワープロが普及し価格も安くなり始めた時期でした。手書きで論文を書くのは大変でしたが、ワープロを使うとスムーズに書けるようになったんです。読書に励んだことが、幾らかは読解力と語彙力を高めてくれたのかもしれません。そして、文章力増強にもつながったのでしょう。あと、英文タイプライターの経験が意外と役立ちました。早稲田大学の学生の時、英語のサークルに在籍していて、英文タイプライターがほぼ必須でした。必要に迫られ、タイプライターで英文を打つことに幾らか慣れました。ワープロやパソコンのキイボードの配置は英文タイプライターと同じでしたから、ワープロやパソコンで文章を書くのにはあまり苦労しませんでした。

―英文タイプライターの経験が、デジタル時代の情報発信に繋がるとは驚きです。大学院ではどのような研究をされていたのですか？

大学院では修士論文で、実家の寺の鎮守さんである秋葉三尺坊権現について調べました。その論文が本になった時は、親も喜んでくれたと思います。住職になって3年ほど経ってから、この修士論文の内容をもとに、曹洞宗学術大会で研究発表もしました。曹洞宗宗学大会・教化学大会（現在は学術大会）で4回ほど研究発表しました。その後、平成7年には可睡斎の33年ぶりのご開帳に合わせて、「秋葉信仰」に関する研究書を出版することができました。静岡大学の教授や出版社の方々と協力して作った本で、最初は一般向けだと思っていたのですが、専門書シリーズの31番目として出版されることになり、私も驚きました。

―学術的な活動も精力的に行われていたのですね。公務員として税務署にお勤めだった経験も、文章力に影響を与えましたか？

国税専門官試験というのに合格し公務員となり税務署の資産税部門で働いていました。同期には公認会計士や税理士を目指していた人も多かったです

ね。私は法学部卒でしたが、大学時代は真面目に法律を勉強していなかったので、税務大学校で学び税務署での実務を通して法律がわかるようになりました。簿記や財務諸表論は苦手でしたね。法律の条文は独特の表現が多く、自分で理解出来ても納税者にわかるように説明するのは難しい。仏教語を噛みくだいて説明することの難しさと相通じるかもしれませんね。実務も苦労しました。税務調査を行えば、報告書も書かなければならない。上司や先輩に指導いただき、何回も書き直しさせられました。税務署での経験が会報やブログに活かされているかどうかはわかりません。相談サイト hasunoha の回答もしていますが、元税務署員のお坊さんはあまりいないので、少しは役立っているかもしれません。

―そうした様々な経験が、吉田老師の文章力の土台になっているのですね。東北大学文学部宗教学科の非常勤講師を務められた経験もあると伺いました。

平成15年頃に東北大学の非常勤講師を半年間務めたことがあります。宗教学科の講師の方が急に辞められて、代わりに誰かという話になった際に、平成7年に「秋葉信仰」の本を出していた実績があったからか、私に声がかかりました。講義は大変でしたが、学生さんのレポートを読むと宗教についての面白い勘違いもあり、勉強になりました。

情報発信の継続と現代社会への対応

―ブログのアクセス数や読者からのフィードバックはいかがでしょうか。私自身、広報委員として記事を書いていますが、なかなか読者の声が届かないことに不安を感じることがあります。

ブログの場合、アクセス数で見ると、多い時でも１００アクセスというくらいで、普段は10から30程度、たまに7、8くらいのこともあります。逆に「なんでこんな記事を見に来たんだろう」と思うこともありますよ。アクセス数は多くありませんが、ある本を読んで感想をブログに書いたら、その著者の方から次の本を送っていただいたこともありました。インターネットで発信していると、意外な繋がりができることがあるのはありがたいことです。会報に載せた記事や行事報告等を中心に年間に20～30くらいの記事をアップしています。核家族化の時代ですから、檀家さんに会報を送っても、家族皆が読むことはありません。他所に住んでいる家族の目に触れてもらえばいいな、と思ってます。たまに「ブログを見ました」と言って下さるご家族も居ますが、なかなか広がりませんね。

―檀信徒の生活様式が多様化する中で、寺院からの情報発信の重要性はますます高まっていると感じます。特に現代では、葬儀や法事に関する知識が以前ほど継承されにくくなっていますよね。

時代の変化とともに、「先祖を敬う」という大切な心が、ご家庭の中で伝わりにくくなっているように感じます。法事の折には、ご家族皆様でのお勤めをお勧めしておりますが、様々なご事情から、ご年配の方々だけでお勤めされることも少なくありません。若い世代の方々が仏壇のお世話やご法要に触れる機会が減ることで、先祖を敬う心が育まれなくなってきているように感じます。

世代交代が進む一方で、葬儀や法事の内容や意義が継承されなくなっています。こうした儀式は、実体験が無いとなかなか理解できません。説明が上手く伝わらないもどかしさを感じることも多いですね。

葬儀のしきたり等は隣近所や親戚が教えてくれたものでした。それが難しくなった現代だからこそ、私たち菩提寺が檀家の皆様に寄り添い、一つひとつ丁寧にご説明していくことが大事だと思います。そのため「戒名について」「四十九日の意義と準備」といったご説明の文書をお配りするようにしています。

お盆の迎え方も、住宅事情等によって変化してます。盆棚・精霊棚の設置が出来なくなり仏壇の前に小さなテーブルを置いて供物を備える等の対応にならざるを得ません。時代の流れの中で、法要・儀式の意義をどう継承していくか考え、継承していくよう努めていくしかないですね。こういう面に関しては葬儀社の方がホームページで情報発信していると思います。私たちお寺側も遅れを取ってはならないと思います。時代の変化に対応し、寺の存在価値を再構築していかねばと思います。教団としても、個々の寺としても、未来を見据えての対応が求められると思います。

若い僧侶へのメッセージと学びの姿勢

―最後に、文章を通じて情報発信をしようと考える若い僧侶たちに、何かアドバイスをいただけますか？

偉そうなことは言えませんが、まず「学び続けること」と「自分が伝えたいことを発信しようという意欲を持つこと」が非常に大事だと思います。最初から高度なものが書ける人はいません。私自身も文章は苦手でした。しかし、継続して積み重ねる中で学びが深まったり、スキルが向上したりするものです。また、どういう発信が皆さんに喜んでもらえるかを考えることも大切ですね。とにかく、発信する意欲だけは持ち続けてほしいと思います。

―新しい広報委員などは、自分の書く文章で本当に伝わるのか、不安が大きいと思います。どのように励ましてあげれば良いでしょうか？

それぞれの人がそれぞれの感性を持ち、いろいろな気づきがあります。ですから、それぞれの人が気づいた範囲で企画を考えることも良いことです。一生懸命やっても、必ずしもすぐに結果が出るとは限りませんが、その活動を見て関心を持つ人が一人でも出てきてくれれば、それが一番だと思います。記事を書くこと、記録を残すことは大事です。うちのお寺でも、先代住職が建立したブラジルのお寺の40周年の際に、洞林寺の記録を整理して記念誌にしました。洞林寺の護持会30周年の際にも、護持会会報の記事

を編集して記念誌を作りました。過去にあったものを整理し、今あるものを記録して後に残していくという思いで、会報やブログを続けているのです。年齢を重ねて衰えを感じることもありますが、学び続ける姿勢は大切にしたいと思います。会報の原稿を書くのは今でも難行苦行ですが、そうやって書いたものがいつか役立つこともあります。これからも学び続け、できる範囲で情報発信を続けていきたいと思います。

取材／広報副委員長　信行一宏
広報委員　仙石鳳順

文章に込めた想い

伝えまし　うけつぎ来たり　有難や

「この想いは、本当に伝わっているんだろうか」

広報誌『SOUSEI』の制作に携わる私たち広報委員が常に抱えるこの問いは、広報活動に限らず、僧侶として日々の務めの中で誰もが一度は感じる切実なものでしょう。情報が洪水のように押し寄せる現代において、仏様の教えや自らの想いを、その温かさを保ったまま相手の心の奥底へ届けることは、決して容易ではありません。この「伝える」ことの難しさと、その営みを未来へ「残す」ことの尊さ。今回の特集「伝える言葉、残す想い」では、この根源的なテーマについて、作家・教育者の大竹稽先生と、仙台市洞林寺住職の吉田俊英老師という、二人の識者のお話を伺いました。両氏の言葉は、私たちが文章と向き合う上での心構えと、その実践を続けるための大きな示唆を与えてくれます。

「書くこと」は「究極の遊び」―不完全さの中に光る人間味

文章を書くとなると、多くの人が「書かねば」という義務感やプレッシャーに苛まれます。しかし、作家の大竹先生は、書くことを「究極の遊び」だと表現します。その原点は、完璧な文章を構築することではなく、むしろ「自分との対話」を通じて、自身の「できなさ加減」を認識し、それをさらけ出すプロセスにあると言います。

知識の量や表現の巧みさだけを追求すれば、いずれAIに敵わなくなる時代が来ています。AIが生成する文章は、そつなく整ってはいますが、そこには個性や「雑なもの」がありません。大竹先生が強調するのは、まさにこの「仕上がっていないからこその個性」です。完璧を目指すのではなく、あえて不完全な自分をさらけ出し、読み手の懐に飛び込むような姿勢こそが、読み手の共感を引き出すのです。

そのための具体的な実践として、先生は「雑に」メモを書き出すことを勧めます。最初から型にはめようとすると苦行になりますが、まず自分の中から生まれてくる雑草のような言葉の断片をとにかく出し尽くしてみる。その中にこそ、思わぬ美しい花を咲かせる種が隠れていると言います。この姿勢は、雑念を払い、あるがままの自分と向き合う坐禅の修行にも通じるものがあるかもしれません。AI時代だからこそ、この人間らしい「でこぼこ」や「不完全さ」を恐れず、むしろそれを強みとして表現していくことが、私たちの文章に血を通わせ、心に響くものにする鍵となるのでしょう。

「難行苦行」の先に拓かれる道―継続が紡ぐ伝承の糸

大竹先生が「書くこと」の内的・哲学的な側面を語ってくださった一方で、吉田俊英老師は、長年の実践に裏打ちされた「継続」の尊さを教えてくださいます。意外にも、老師はかつて文章や法話を「苦手」とし、それを「難行苦行」と感じていたと語ります。その言葉は、同じように悩む多くの青年僧侶にとって、大きな慰めと勇気を与えてくれるのではないでしょうか。

老師の文章力の礎は、一朝一夕に築かれたものではありません。大学院での論文執筆、国税専門官として法律文書に触れた経験、学術大会での発表や書籍の出版など、多様な経験の地道な積み重ねが、その表現を豊かにしてきました。そして、その情報発信の原点は、ブログよりもさらに遡る寺の会報にあります。檀家さんや役員さんを巻き込みながら、多い時には16ページにも及ぶ会報を長年にわたり発行し続けてきたその実践は、「伝える」営みが決して孤独な作業ではなく、コミュニティと共に育むものであることを示しています。

結び―想いを未来へ繋ぐために

今回の特集を通じて見えてきたのは、「伝える」という行為が、単なる技術論に留まらない、深く豊かな精神的営みであるということです。それは、大竹先生の言うように、自らの不完全さと向き合う「自分との対話」であり、吉田老師が示すように、弛まぬ学びと実践を要する「修行」でもあります。

完璧な言葉でなくとも、格好つけず、自分のできなさ加減を認めるところから始める。雑多なメモの中から、伝えたいことの核を見つけ出す。そして、たとえすぐには結果が出なくとも、学び、発信する意欲を持ち続ける。この二人の識者の言葉は、対照的に見えながら、その根底で深く響き合っています。

私たちが今、二千数百年前の仏様の教えに触れることができるのは、先人たちがそれを経典という形に「残してくれた」からに他なりません。吉田老師が寺の記録を冊子にし、会報やブログを続けているのも「過去にあったものを整理し、今あるものを記録して後に残していく」という未来への強い想いがあるからです。

私たちの言葉は、不完全かもしれません。しかし、その不完全な言葉に誠実な想いを込めて紡ぎ、残していくこと。その営みこそが、時代を超えて教えの灯火を「うけつぎ」、人々の心に届ける道なのではないでしょうか。この特集が、日々の活動の中で「伝える」ことに悩み、奮闘する皆さんの次の一歩を踏み出す力となることを、心から願っております。

文／広報副委員長　信行一宏

ソウセイネットワーク

曹洞宗静岡県第一宗務所青年会

全国の加盟曹青会の活動情報を共有し、青年会活動のさらなる活性化を目指す本連載。今号は、曹洞宗静岡県第一宗務所青年会をご紹介いたします。

青年会情報

曹洞宗静岡県
第一宗務所青年会

平成5年発足
会員数56名
会長／平尾隆朋
普済寺住職

■会の概要について教えてください。

曹洞宗静岡県第一宗務所青年会は平成5年に発足し、一昨年には30周年を迎えました。静岡県第一宗務所管内では東部・中部・西部という枠組みがあります。青年会発足以前は、青年僧侶の活動もその枠組みを超えることはあまりありませんでしたが、管内統一の青年会が発足したことで、地域を越えた交流がより活発になり、各種の研修やボランティア、布教教化などの多様な活動が展開されてきました。

■最近はどのような取り組みに力を入れていますか。

前期の2年間で、全会員で参加する企画コンペを実施しました。4、5人の班に別れ、それぞれの班で企画を立案してプレゼンし、会員投票で実行に移す企画を選びました。

当会ではこれまで長らくボランティア、教化研修、広報の3つの委員会による活動を行ってきました。どの会員もいずれかの委員会に所属する形式です。今回は一度その組織を大きく変えてしまうことになり不安もありましたが、実際にコンペに臨んでみると各班のメンバーの興味や問題意識に沿って様々な提案が行われ、会員の研鑽・研修から一般向けの教化活動まで幅広い活動に繋げることができました。

■新たな挑戦に込められた想いをお聞かせください。

現在、会員数の減少や、時代の変化などに伴い、これから青年会をどうしていくかを考えるべき節目が到来していると思います。そこで、そういった検討を会の中で行う前に、まずは会員一人ひとりが主体的に企画を考え、運営するという経験を積むことが大切だと考えました。

これまでは、いずれかの委員会に所属することで全員が活動に携わることになっていたのですが、一つの委員会で20名近く所属することになり、委員の中でも活動に対する温度差がある場合も見受けられました。委員長としても20人全員の意見を満遍なく聞いて方向性を定めるというのは簡単なことではないと思います。そこで少人数の班を作ることで、全員が話し合いに参加できる環境を作り、会員が自分たちで考え、自分たちで選んで実行する活動を行うことを目指しました。

企画コンペの様子

■具体的にどのような企画が実行に移されましたか。

昨年でいえば、まず教誨師を務めている会員のいる班の企画で、保護司の方のお話を聞いた後で刑務所を訪問するという研修が行われました。あらゆる立場の人と向き合う僧侶の在り方について思索を深める有意義な研修になったと思います。

また、花まつりの頒布品としてオリジナル散華を作成いたしました。従来から、各地区の青年僧侶の手で

オリジナル散華祈祷法要
オリジナル散華

4月初旬に街頭で花まつり布教カードを付けた生花を配る活動が行われておりました。全曹青第9期の「花まつりキャンペーン」の流れも汲む活動です。しかしながら近年の物価高もあり、生花では配布できる数が限られてしまうという課題もありました。そこで新たな頒布物として、会員にデザインを募集してオリジナルの散華を作成し、飴と同封して配布するセットを作成しました。

単にデザインするだけではなく、事前に会員の手で大般若祈祷法要を修行し、そこでこの散華をお供えしてから配布しました。さらに法要の様子を撮影して動画に編集し、散華にプリントした二次元コードから再生できるようになっています。デザインや、法要・ご詠歌、撮影・動画編集など、会員それぞれの得意分野を結集し、形にすることができた企画でした。

■伝統と現代の技術が組み合わさった活動ですね。新たな取り組みについて伺いましたが、長年継続されている活動についてもお教えください。

継続的な活動の柱の一つとなっているのは、災害ボランティア活動ではないかと思います。静岡県では、何十年も前から東海地震、南海トラフ地震に対する備えが続けられていて、防災や被災地支援に対する意識・関心が高いこともあり、発足以来、地震や豪雨災害などの被災地でのボランティア活動に積極的に取り組んできた先輩方の積み重ねがあります。近年では、２０２２年の台風15号襲来の際に、管内寺院でも土砂崩れなど大きな被害を受けたところが少なくなく、被災時の助け合いの重要性を改めて実感いたしました。

そうした中で昨年発災した令和６年能登半島地震に際しては、管内ご寺院様方からも力強いご支援をいただき、がれきや土砂の撤去、清掃作業から、現在の行茶傾聴活動まで、現地での活動を継続させていただいております。

■今後の展望をお聞かせください。

これまで各種の活動を通じて、今後の方向性について各自が考え、互いに意見を交換するための下地ができてきているのではないかと感じています。今期はそうした検討のための特別委員会も設置しました。同年代の青年僧侶同士が互いに助け合いながら課題に取り組み経験や絆を深めていける組織づくりを目指したいと思います。さらにそうして培われたものがそれぞれのお寺の運営にも活かされてくると、青年会活動がより一層意義深いものになると考えております。

取材／広報委員長　竹田龍永

曹洞宗静岡県第一宗務所青年会から出向しています。

教化副委員長 福島順良

広報委員長 竹田龍永

国際委員 徳月泰成

「世界とともに歩む」

今号より新連載「世界とともに歩む」がスタートいたしました。国際委員会との協働のもと、世界中の様々な地域で、様々な機縁により仏道を歩まれている方々をご紹介してまいります。

今回は、カリフォルニア州サンフランシスコに所在する曹洞宗国際センターで書記を務める西村全機師にお話を伺いました。

西村全機　師

長崎県平戸市出身
山口県山口市　法明院徒弟

大学卒業後、フィリピンへの語学留学、アメリカでの水泳コーチとしての滞在を経て、皓臺寺専門僧堂、大本山總持寺にて安居。令和４年、北アメリカ国際布教師、曹洞宗国際センター書記に任命。

アイルランド、ダブリン禅センターでの摂心中の経行

―どのようなきっかけで国際布教に携わられるようになったのでしょうか。

私はとにかく人とお話をすることが好きで、英語はあまり得意ではなかったのですが、海外の方とも積極的に交流してみたいという思いは昔から持っていました。

学生時代に水泳のコーチのアルバイトをしておりまして、そのご縁で卒業後、アメリカに1年間滞在する機会を得ることができました。さらにそのとき、現地の曹洞宗寺院を訪ね、餅つきやお祭り等の行事のお手伝いもするうちに、国際布教に携わってみないか、とお誘いをいただきました。その後、地元長崎の皓臺寺専門僧堂と大本山總持寺での安居を経て、実際に現地で国際布教に携わらせていただくことになりました。

よく誤解されるのですが、私は特別日本よりも海外の方が好きというわけではありません。ただ、とにかく様々な人と関わることが好きで、その中で得たご縁を大切にしていきたいという想いが強くあります。

―ご縁に導かれて、国際布教の道を歩まれているのですね。現在いらっしゃる曹洞宗国際センターでの活動についてお教えください。

国際布教の拠点としては、まずハワイ、北アメリカ、南アメリカ、ヨーロッパの日本国外の４か所に国際布教総監部が設置されています。こちらは日本国内でいう宗務所にあたる役割を担っております。それに対して国際センターは管区の教化センターに例えることができると思います。各種の研修や視察交流を通じて、日本国外の檀信徒に対する布教教化や曹洞宗僧侶の支援を行う役割があり、対象エリアは日本国外全体となります。

また一般の方に直接布教活動を行うこともあり、企業や大学に出張して参禅指導を行うこともあります。

―お寺ではない場所での、海外の方、初心者の方への坐禅指導で求められる工夫などあるのでしょうか。

基本的に坐禅会に参加される方々はすでに「坐禅」や「禅」に興味を持って参加してくださるので、それほど困ること

北アメリカ国際布教１００周年記念授戒会での知殿寮

はありません。ただ日本での当たり前が海外での当たり前であると思わず、何事もしっかり説明することが大切だと感じています。例えば警策などは、日本では一般の方も坐禅のときに使うものという認識がありますが、海外の方にとってはあまりなじみがありません。暴力的な印象を受けたり、懲罰のように感じる方もいらっしゃいます。それでも、その意味合いをしっかりと説明することで自分も受けてみたいという方もいらっしゃいます。

―現地の僧侶や参禅者の方々との関わり方について教えてください。

現職研修などの各種の行事や法要をきっかけにご縁の輪を広げています。最近では瑩山禅師700回大遠忌への日本国外からの焼香師参拝団を組織することで、両大本山へ参拝する機会を作るのと同時に、参加者の中でも国境を越えた新たな交流が生まれました。

そうしてできたご縁を頼りに現地の寺院・禅センターに訪問させていただく際には、「ともに修行させていただく」という意識を大切にしています。

文化や環境の違いもあり、すべてを日本と同じように行ずることは難しい場合があります。例えば、お袈裟は基本的に得度を受ける前に自分で手縫いをしたり、仏具も既製品は簡単に手に入らないため、僧侶や檀信徒の方が手作りしたり、代替品を使用することもあります。法式も日本とは少し異なることもあります。しかし、そうした中で、最初から「これは日本とは違う」と否定するのではなく、まずは一緒に坐り、一緒に日常の行持を行うようにしています。そうした中で、どういった経緯で現在の実践があるのかお話を伺えることもあり、また作法などについて質問をいただくこともあります。

現地の方が手作りする仏具

僧籍の有無を含め様々な立場で曹洞禅に関わる方がいらっしゃいます。しかし日本から遠く離れた地で同じ一仏両祖に手を合わせる仲間がいるありがたさを忘れないようにしたいと考えています。

大遠忌の焼香師参拝団による大本山總持寺での暁天坐禅

―なるほど。海外の話ではついつい日本との違いに目が行ってしまいがちですが、どこにいっても同じことを行じていることの素晴らしさ、というのも見逃さないようにしたいですね。国際センターでの現在の活動についてお話を伺いましたが、今後の活動の指針や目標についてもお聞かせください。

現在、世界的に寺院・禅センターの後継者不足が課題となっています。そうした中で、若い同世代の方々と出会えると、自分と同じ道を歩む仲間がいることに、とても嬉しい気持ちが湧いてきます。私自身青年僧侶の一人として、世界中の若い世代を結びつける活動に力を入れていきたいと考えています。

もちろん日本の青年僧侶も積極的にその輪の中に加わってもらいたいと思いますし、そのために全曹青とも協力していけたらと考えています。最終的に、国際センターや総監部が仲介しなくても直接海外と日本でやりとりできる関係ができるとよいのではないでしょうか。

私も含め、国際布教に携わる日本人僧侶の多くは任期がある中で活動している場合が多いです。そのおかげでより多くの人が国際布教に関わることができているのですが、担当が交代していっても事業を引き継いで行ける仕組み作りも大切にしたいです。

―改めて同世代の青年僧侶に向けて伝えたいことはありますか。

オンラインでも手軽に世界とつながれる世の中ではありますが、やはり現地に行くこと、対面で交流することに優るものはありません。言葉が流暢でなくても、一緒に肩を並べて坐禅や、作務、法要を行うことでお互いに伝わってくる想いや熱量があります。ぜひそういった機会を逃さず、一歩を踏み出していただければと思います。

取材／広報委員長　竹田龍永
国際委員長　髙倉秀哲

レポート全曹青

第26期両大本山拝登

本年5月に第26期の新体制が始動し、宮本会長をはじめ三役・顧問・監事を中心に両大本山に拝登させていただきました。

大本山總持寺では石附周行紫雲臺猊下に拝問させていただきました。引き続き渡辺啓司監院老師にお目にかかり、新体制始動のご挨拶をさせていただきました。少子化等近年の社会問題にも触れられ、混迷する社会の中で大衆教化の接点を突き詰めていくことの大切さをお示しいただき、激励を頂戴しました。

大本山永平寺では、小林昌道監院老師にご面会いただきました。再来年三十三回忌となる阪神・淡路大震災当時を振り返られ、当時の大本山永平寺の活動や、災害復興支援活動に青年僧侶が乗り出した際の、社会的な様子をお教えいただきました。現在の全曹青の活動が多岐にわたる中で、それらの経験の継承と活動のさらなる活性化への激励を頂戴しました。

曹洞宗の根幹たる両大本山にご挨拶させていただき、第26期全曹青の活動に邁進する決意をより一層強くする拝登となりました。

文／事務局長　菅悠生

大本山總持寺拝登

大本山永平寺拝登

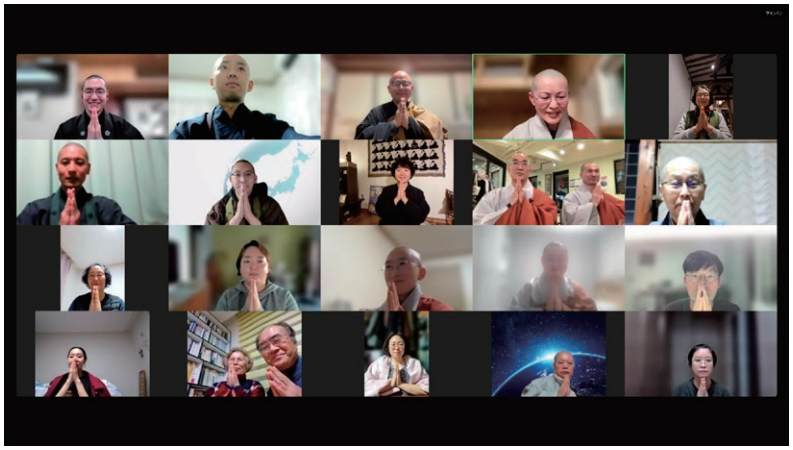
「Korea-Japan Zen Club」

全曹青では前期より韓国曹渓宗国際伝法団と協働で、日韓の交流企画「Korea-Japan Zen Club」を実施してまいりました。今期もこの海を越えた良縁をさらに深め、拡げるべくその開催を継続いたします。

本企画の交流会では参加者がそれぞれの作法で共にひと時の坐禅を行じます。また文化交流の時間も設けられ、これまでにはソウルの街中でゲストハウスのような寺院を運営する取り組みや、日本の曹洞宗の成り立ち、両国の年越し行事や韓国の「燃灯会」など様々な題材が取り上げられてきました。継続開催に先立ちプレ開催を実施し、改めて今期の開催準備を進めております。

隣国でありながら、お互いに知らないことが多いことに気付かされ、相互理解を深める重要性を感じます。国ごとに独自の発展を遂げてきた仏教の多様性や世界宗教としての仏教について知る機会となり、同時に国や地域、言語の壁を越え、同じ仏教徒として手を携えることのできるありがたさを強く感じることのできる企画となっております。ぜひ今後のご案内にご注目ください。

文／広報委員長　竹田龍永



日韓の参加者（前期開催時）

韓国の「燃灯会」紹介動画（前期開催時）

災害復興支援部 ニュースレター

行茶傾聴活動「おぼうさんカフェ」について

第26期でも能登半島地震復興支援を目的とし、行茶傾聴活動「おぼうさんカフェ」を継続して行っております。この活動は、被災された方々と一緒にお茶を楽しみ、時には写経や数珠づくり等を体験していただくことで、心が安らぐひとときを共有するサロン活動でございます。全曹青だけでなく各加盟青年会が主催となって実施しており、シャンティ国際ボランティア会（SVA）の協力のもと調整を行っております。

全国各地の青年会から持ち寄られた地域の銘菓や飲み物を楽しみ、各県独自のワークショップを通じて自然と会話が弾む中で、「心の声」に耳を傾けています。この活動が、被災された方々の心を少しでも和ませることができればと願っております。

能登半島では震災から約1年半が経過し、少しずつ復興が進んでいたところに、本年8月の線状降水帯による豪雨で再び被害が発生しました。日常生活を取り戻そうと懸命に動かれている現地の方々の心情を想うと胸が痛む思いです。一日も早い復旧を心からお祈り申し上げます。

私たちは被災地の皆様に引き続き息抜きの場を提供してまいります。お盆などの多忙な時期を除き、現在は1ヶ月に1回以上のペースで開催できております。参加された曹青会員からは「地元住民の方がとてもリラックスできて、有意義な時間を過ごせているように感じる」というありがたいお言葉もいただいております。これは、ひとえに各加盟曹青会の皆様の献身的なご尽力のおかげです。また、行茶の道具の貸し出しや宿泊場所の提供といった支援をしてくださっている總持寺祖院様にも、心より感謝申し上げます。

現在、石川県輪島市門前町にある集会所や公民館で主に活動しておりますが、要望があればその他の被災地域でも開催いたしますので、ぜひご連絡ください。

これまでの活動は、皆様の被災地に対する温かい想いによって支えられています。全曹青災害復興支援部は、引き続き各加盟曹青会や関係団体と連携し、被災地の皆様が一日も早く安心できる日常を取り戻せるよう、これからも支援に努めてまいります。

数珠づくりセット

令和7年度夏季豪雨・台風被害について

令和7年8月から9月にかけて各地で豪雨や台風による被害が相次いでおります。8月上旬には九州・北陸で線状降水帯による記録的大雨が発生し、各地で浸水や土砂災害、河川の氾濫などの被害がございました。また9月上旬にも台風15号の影響で全国各地が豪雨に見舞われるとともに、静岡県では竜巻の突風による被害も発生いたしました。

亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被害を受けられた皆様が1日でも早く日常を取り戻されることを心よりご祈念申し上げます。

全曹青では各加盟曹青会との連携のもと、災害メーリングリストを通じて各地域と宗門寺院の被害状況、ボランティア活動等について情報共有を行わせていただいております。今後も情報収集を継続し、必要な支援を行ってまいります。被災地域の皆様におかれましてはご自身のご健康、身の回りの安全を第一としていただきながら、引き続き情報共有へのご協力の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

文／災害復興支援部事務局長
高杉春輝

全日仏青NEWS

JYBA
ALL JAPAN YOUNG BUDDHIST ASSOCIATION

「万博寺」参加とWFBY役員来日報告

大阪市の人工島・夢洲で開催されていた大阪・関西万博に9月26日、1日限りのお寺「万博寺（ばんぱくじ）」が登場し、約250人の僧侶が宗派や地域を超えて会場の東ゲート前ポップアップステージに集いました。全日仏青に加盟する9つの宗派の各青年会・連盟と4つの地域仏教青年会からも、多くの僧侶が参加いたしました。また、この日のために世界仏教徒青年連盟（The World Fellowship of Buddhist Youth、以下WFBY）よりイタノン・タイアリー事務総長とジラユ・カエパネオ会計長が来日し、イベント視察を通して全日仏青の僧侶と交流しました。本誌面をもってその様子をお伝えいたします。

イベント前日には大阪駅直結の商業施設ルクア大阪で前夜祭が開催され、来馬司龍（くるばしりゅう）全日仏青理事長が挨拶を述べました。会場では稚児行列や雅楽演奏に始まり、マジック説法やバンド演奏など様々なパフォーマンスが披露されました。また、WFBYの2名を囲み懇親会が開かれ、全日仏青の僧侶達と親睦を深めました。

当日、当会顧問でもある村山博雅WFBY会長と畑辰昇国際委員のアテンドのもとWFBYの両氏は万博会場へ向かい、各宗派の儀礼儀式ステージ「命告（いのり）」に同席しました。村山博雅WFBY会長が導師を務める「万博寺落慶法要」では、各宗派の僧侶が同音に般若心経を読誦し、様々な装束の僧侶達と共にWFBYの両氏も祈りを捧げました。

「世界の恒久平和と、持続可能な地球のために祈りを捧げる」という村山師の力強い宣言をもって、法要のバトンは曹洞宗僧侶による「万国慰霊法要」へ。宮本昌孝全曹青会長が導師を務めた本法要では、修証義1章を読誦・行道した後、今万博に参加表明した国や地域を読み込み、祈りを捧げました。WFBYの両氏は各演目の合間に各国のパビリオンを見学され、その日の夕方に関西空港発の飛行機で帰路につきました。参加した全日仏青の僧侶にとって、そして来日した両氏にとっても意義深い事業となりました。

文／広報委員　本田真大

「万博寺落慶法要」

全曹青の「万国慰霊法要」

法要に参列するWFBY役員のお二人

「万博寺」の御朱印

Real Voice

執行部からのごあいさつ

副会長　宮本貴心
宮城県曹洞宗青年会

この度、第26期副会長の任を拝命いたしました。前期には全曹青創立50周年を迎えることができ、これまで活動を繋いでくださった諸先輩方の熱意を感じました。その想いを受け継ぎ、全曹青が連絡協議体としての役割を果たし、青年僧侶が自由で創造的な活動を継続できるように微力ながら尽力してまいります。

副会長　神野太賢
愛知県第一曹洞宗青年会

かつて安居中に「お経は耳で読め」と言われたことがあります。独りよがりに読むのではなく「周りの声をよく聞いてしっかり合わせなさい」ということです。全国から青年僧侶が集まるこの全曹青において、様々な活動を推し進めていくと同時に、周りの声や状況にしっかりと耳を傾け調整していくことも副会長の大切な役目かと思います。全国の青年僧侶と、そして世界の人々と歩調を合わせ「ともに歩む」こと。第26期もしっかりと努めてまいります。

副会長　佐藤大起
宮崎県曹洞宗青年会

3期目の出向となり、副会長の大役をいただきました。これまでの4年間、他ではできない多くの経験を積むことができました。全曹青に少しでも恩返しができるよう、そして自身がさらに成長できるよう懸命に2年間務めていきたいと思います。出向者全員が活躍し、一つの大きな力となってともに歩みを進めていけるようサポートしてまいります。

事務局長　菅　悠生
広島県曹洞宗青年会

前期において創立50周年を経た今期全曹青では、スローガン「ともに歩む」を掲げております。事務局としましても、連絡協議体として日本全国の青年僧侶がともに活動に邁進いただけるよう、円滑で即応的な会の運営を目指し努めてまいります。皆様、2年間何卒よろしくお願いいたします。

会　計　神野元秀
曹洞宗岐阜県青年会

前期は50周年記念事業実行委員を務めさせていただき、今期が2期目の出向となります。会計業務を通して、全国曹洞宗青年会は全国のご寺院さまや、会員の皆様の支援によって支えられていることを改めて実感しております。至らぬ点も多々ありますが、会の運営が円滑に進むように取り組んでまいります。よろしくお願い申し上げます。

顧　問　村山博雅
特別会員

世界仏教徒青年連盟（WFBY）会長、全日本仏教青年会顧問とともに、世界仏教徒連盟（WFB）の執行役員をつとめます。スローガン「ともに歩む」は、国際社会に照らす時、世界の恒久平和と持続可能な地球を目指すために、必要不可欠な宣言です。地域から全国、世界への視野の拡大が、全曹青の未来に繋がるという確信のもと、執行部の諮問に全力で応えてまいります。

顧　問　山田俊哉
秋田県曹洞宗青年会

スローガン「ともに歩む」は、前期における華々しい50周年事業を経験し、全曹青の結束を改めて確認した上で、さらなる未来への歩みを踏み出すために全国同志に呼びかける、まさに初心を喚起する実直な決意と存じます。会長以下、今期面々の気概と誠実さが力強くあらわれております。顧問として、その歩みに微力ながら寄与すべく努めてまいります。

全国曹洞宗青年会の活動にご理解とご協力を賜り、衷心より御礼申し上げます。
お預かりした賛助費は活動の大きな支えとして活用させていただくとともに、
またボランティア基金として災害復興支援活動に充てさせていただきます。

◆宮城県
43　玉川寺様
55　實相寺様
59　明星寺様
252 福嚴寺様
284 西雲寺様
420 玖光院様
440 城國寺様
461 洞松院様

◆岩手県
52　福蔵寺様
55　長壽寺様
81　円城寺様
147 龍徳寺様

◆青森県
100 澄月寺様
183 大乗寺様
189 乗照寺様

◆山形県1
24　養千寺様
36　久昌寺様
142 陽春院様
181 祥雲寺様
184 林堤寺様

◆山形県2
285 泉髙院様
345 光岳寺様
417 繁應院様
418 竜雲院様

◆山形県3
671 海禅寺様
734 東光寺様

◆秋田県
20　林清寺様
186 永泉寺様
302 天昌寺様
313 立昌寺様
338 圓通寺様

◆北海道1
13　曹溪寺様
45　延命寺様

インターネット受付分

◆埼玉県第2
575 大願寺様

◆島根県第1
333 宝泉寺様

◆秋田県
265 倫勝寺様

◆静岡県1
165 光明寺様

◆島根県第2
199 妙樂寺様

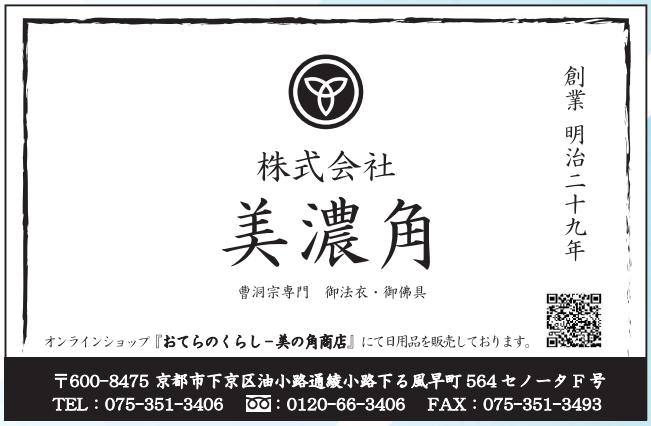
お詫び

『SOUSEI』第210号P16掲載の「令和7年度全国曹洞宗青年会一般会計歳入歳出予算」並びにP18掲載の「令和6年度全国曹洞宗青年会ボランティア基金報告」内「東日本大震災慰霊復興法要歳出内訳」に誤りがございました。

下記の通り訂正させていただきます。正確を期すべきご報告に誤りがありましたことを深くお詫び申し上げます。

P16　「令和7年度全国曹洞宗青年会一般会計歳入歳出予算」
誤　歳入総額　35,900,000円　歳出総額　35,900,000円
正　歳入総額　28,720,000円　歳出総額　28,720,000円

P18　「東日本大震災慰霊復興法要歳出内訳」
誤　合計　5,168,697円
正　合計　1,231,580円



賛助費浄納芳名簿

2025年7月1日～2025年9月30日取扱い分

◆東京都
14　法音寺様
210 法清寺様

◆埼玉県2
331 曹源寺様

◆群馬県
99　龍傳寺様
194 善宗寺様
311 泉通寺様

◆栃木県
93　乾徳寺様
175 本光寺様
192 長昌寺様

◆茨城県
145 性山寺様
160 定林寺様
197 長龍寺様

◆千葉県
22　廣壽寺様
198 太髙寺様
296 東善寺様
357 永福寺様

◆山梨県
339 南明寺様

◆静岡県1
34　洞慶院様
127 楞厳院様
421 盤脚院様
552 貞善院様

◆静岡県2
325 海藏寺様
368 曹洞院様

◆静岡県4
1061保福寺様
1105仙林寺様
1140竹林寺様

◆愛知県1
5　功徳院様
55　長全寺様
101 成福寺様
135 光明寺様
147 成道寺様
229 寶泉寺様
313 長松寺様
605 天徳寺様
635 永澤寺様
824 東昌寺様

◆愛知県3
557 楞嚴寺様
1216庚申寺様

◆岐阜県
153 宗久寺様

◆三重県1
276 地蔵院様
334 佛光寺様
364 観音寺様

◆京都府
11　洞泉寺様
161 禅福寺様
171 太虚寺様
236 善光寺様
378 徳昌寺様
389 萬福寺様

◆大阪府
26　天徳寺様
40　伊勢寺様
107 實相院様

◆奈良県
55　平等寺様

◆兵庫県1
287 向榮寺様

◆兵庫県2
149 瑞光寺様

◆岡山県
3　長川寺様

◆広島県
46　双照院様
59　松寿寺様
67　西福寺様
76　長福寺様
86　西金寺様
133 少林寺様
135 鳳林寺様
194 瑞光寺様

◆山口県
25　弘済寺様
72　真福寺様
96　妙光寺様
121 常安寺様
243 覚天寺様

◆鳥取県
151 安国寺様
170 大安寺様

◆島根県1
209 圓通寺様

◆島根県2
32　宗淵寺様
36　舜叟寺様
63　龍覚寺様
66　浄心寺様
70　完全寺様
187 養善寺様
195 總光寺様
196 高禪寺様

◆愛媛県
146 興雲寺様
169 宝泉寺様

◆福岡県
5　妙徳寺様

◆大分県
36　浄土寺様

◆長崎県1
42　西方寺様
78　宝泉寺様

◆佐賀県
252 龍雲寺様

◆熊本県2
78　地藏院様
122 國照寺様

◆長野県1
242 如法寺様
330 興善寺様
338 長谷寺様
587 観音庵様

◆長野県2
389 宗福寺様

◆福井県
27　龍澤寺様
232 長泉寺様

◆新潟県1
350 定光寺様
358 円光寺様
382 光照寺様
389 雲居寺様
393 曹源寺様
394 常安寺様
487 宝泉寺様
496 長樂寺様

◆新潟県4
238 光淨寺様

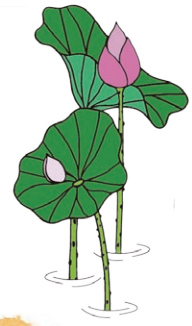
◆福島県
58　西泉寺様
101 成林寺様
111 普光寺様
121 長泉寺様
156 大龍寺様
226 常隆寺様
274 龍門寺様
461 正法寺様

全曹青からのお知らせ

ダウンロードイラストのご紹介

全曹青公式 HP『般若』にはダウンロードイラストのページがございます。
デフォルメされた可愛らしい動植物のイラストや法要の様子、梅花講に関するものまで幅広い素材・イラストをご用意しております。檀信徒の皆様へのお知らせ、寺報などをご自身で作成されている方も多いかと思います。ぜひご利用ください。

イラストは定期的に追加されており、本年は静岡県一乗寺住職、丹羽崇元師に 55 点のイラストを提供していただきました。晋山・結制にかかわる様々な法要の様子をリアルなタッチで描いていただいております。ご案内やしおりの挿絵としてお使いいただくと、檀信徒の方々にはあまりなじみのない行事の様子も、視覚的に分かりやすくお伝えいただけます。



また併せてお釈迦様のご生涯の各場面を描いたイラストもご提供いただいておりますので、こちらも三仏忌のご案内などにご活用ください。

活用例

公式HP『般若』ダウンロードページはこちらの二次元コードからご覧いただけます。

HP『般若』より
ダウンロード

表紙の話

今回の特集「伝える言葉、残す想い」にちなみ、校正作業で使うゲラをもとにデザインしました。校正作業を通して、取材対象者の方や、活動に携わった方々の想いを反芻し、形にしていく様子を表現しています。

撮影／広報副委員長　信行一宏

SOUSEI
発行所／全国曹洞宗青年会　〒105-8544　東京都港区芝2-5-2　曹洞宗宗務庁内　発行責任者／宮本昌孝　編集責任者／竹田龍永　編集委員／信行一宏・仙石鳳順・南澤亨全・太田真大・多飯皓成・佐瀬悠真
本誌編集部並びに発行部数に関するお問い合わせ先／〒425-0086 静岡県焼津市小土253　大永寺内　TEL 090-9182-5923　FAX 054-620-3335
制作・デザイン／リブウトアートワーク　印刷所／株式会社グラフィック　定価100円　平成11年6月8日第三種郵便物認可（年4回2・5・8・11月の10日発行）そうせい第211号 令和7年11月10日発行